グローバル化の時代の地域研究－その魅力と意義

加藤　博

現在の世界を理解するためのキーワードに、グローバリズムとリージョナリズムの二つがある。この二つは、ともに世界のグローバル化を不可避と考えるが、それを前者は肯定的に、後者は否定的に評価する。

ここで、世界のグローバル化とは、国境を越えたひと、かね、もの、情報の移動と、それが引き起こす地球規模での経済・政治・社会・文化的諸問題の発生を意味する。その原因ともなり結果ともなったのが、近代以降われわれの生活全般を律してきた近代国家が、20 世紀末にいたって揺らぎ始めていることである。

世界は、明らかにグローバル化している。そのことによって、世界が統一化、均質化すると主張されることが多い。しかし、そうであったとしても、それは世界の平等化を意味しない。逆に、世界での格差は増大しているように見える。

世界のグローバル化は経済に始まり、政治、文化へと波及している。このようななか、近代国家の揺らぎとともに、近代以降の人文社会科学が分析単位として前提としてきた国家を超える分析枠組みの必要が自覚されるようになってきている。このことは、大学の組織においても、「グローバル」とか「地球」とかの言葉を冠した学部や講義が目に付くようになったことからも分かる。

それにもかかわらず、私自身は、グローバルや地球という言葉を避け、地域という言葉にこだわってきた。それは、国家の揺らぎはグローバルにもローカルにも現れているからである。逆説的な表現を使えば、ローカルな次元で観察されないグローバル化などは言語矛盾であり、グローバル化の現象はローカルな次元でこそ観察され得ると信じるからである。

しかし、現実のアカデミズムは、私としては残念なことであるが、これとは逆な方向に展開している。つまり、世界のグローバル化は現在、アカデミ

ズムにも及んでいるが、それは研究の再ディシプリン化という形で現れているように思われる。ディシプリンへの志向は、研究対象の統一化、均質化へと通じ、世界のグローバル化と共振しているからである。

そして、それは、統計学に象徴される、いつでもどこでも使える道具立てを必要とする。そのなかで、研究対象の具体性は類型化される。また、研究対象の多様性は数量化され、数量的な差異として示される。もっとも、それが悪いというわけではない。研究対象の抽象化、相対化を意識しないとき、研究は「独善」に陥る。しかし、それが行き過ぎると、研究が現実から遊離し、言葉や概念がただいたずらに行きかうだけとなる。

地域研究は、少なくとも私の考えでは、ディシプリン志向の研究とは反対のスタンス・姿勢をもつ研究分野である、というか、そうあってほしいと思う。地域という言葉には、その規模や範囲に大小はあるものの、グローバルという言葉とは反対方向へのベクトルが含意されるべきであると考えるからである。

つまり、地域とは、われわれがそこで生活を営む空間であるが、われわれの存在以前にすでにあり、われわれの存在を規定する。また、地域は、いくつかの属性に分解できるようなものでもない。かくて、地域は、われわれの存在の有限性、限界性への自覚を惹起する概念でなければならない。

世界は、いかに統一されるように見えるとも、多様でそれぞれが独自性を持つ地域から成り立っているとの現状認識、そして、いかに世界がグローバル化されたとしても、地域はその自立性と独立性を失うことはなく、逆に、世界がグローバル化されるに伴い、その重要性が自覚されるようになるだろうとの将来への見通しのもとに、はじめて地域研究は可能である。そこから、地域研究は、世界のグローバル化のなかで、世界を普遍化、抽象化、記号化、数量化しようとする志向に対抗する視座を提供しなければならない。

以上、私の地域研究観を素描した。紆余曲折を経て、このような考えを持つに至った。このエッセイでは、その詳細な経緯をたどることはできない。しかし、その間、常に念頭にあった次の二点だけは、指摘しておきたいと思う。第一は、人文社会科学におけるアポリアであり、第二は、時間と空間との関係である。

人文社会科学におけるアポリアとは、ミクロな次元で合理的であることがマクロな次元でも合理的であるとは限らない、そして逆もまたそうだ、ということである。ここでミクロ、マクロを個人、集団と置き換えてもかまわない。このアポリアは、これまでいく人もの知の巨人がその解消に取り組んだものの、それに成功するにはいたっていない。

それは、人文社会科学が、自然科学と異なり、「心」を持つ人間を扱うからであって、これからも、人間がロボットにならない限り、解消しないであろう。したがって、われわれの出来ることといえば、このアポリアの存在を念頭に置きつつ、ミクロな次元とマクロな次元の研究の間を間断なく行き来すること以外にはない。そして、「地域」という概念は、そのために格好な研究の場を与えてくれるように思われる。

ついで、時間と空間との関係とは、先に指摘した、われわれの存在以前にすでにあり、われわれの存在を規定するものであるとともに、それがいくつかの属性に分解できるようなものでもないという地域の性格とかかわる。つまり、われわれの生活は特定の時間、つまり歴史と空間、つまり地域の二つの座標軸の中で展開しているが、地域とは、そこで歴史が展開される具体的な場である。

これまで、時間の学問である歴史学と空間の学問である地域研究は、しばしば、対立するとはいわないまでも、その方向性を異にする学問であると言われてきた。歴史学が「過去」を研究対象とするのに対して、地域研究は「現在」にこだわる学問だというのである。しかし、地域を歴史が集積する場だと考えるならば、歴史と地域は重なる。

こうして、私にとって、地域は歴史と同様、われわれの存在の有限性、限界性への自覚を惹起する概念である。そのため、地域研究と歴史学は、研究対象を抽象化、数量化し、ミクロをマクロ集計のなかに解消する傾向の強いグローバル研究に対抗して、研究対象の具体性、多様性にこだわり、ミクロからマクロを見通す姿勢を持たなければならない。この姿勢は、世界のグローバル化が進行する今日において、ことのほか重要であると思われる。